

EUの生みの親・クーデンホーフ光子

前坂 俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)

欧州連合(EU)は2004年5月に10カ国が新たに加わり25カ国体制となり、大欧州へと拡大中で、21世紀の地域共同体の新しい実験として注目を集めている。

このEUの父といわれるのが一九二三年「汎ヨーロッパ構想」を提唱したリヒアルト・クーデンホーフ・カレルギーであり、その母は日本人・光子である。

明治初期にオーストリア・ハンガリー帝国の駐日代理公使と結婚した光子はヨーロッパの貴族夫人となった最初の日本女性であり、EUのそれこそ生みの親の親なのである。

クーデンホーフ光子は明治七年(1874)、東京麻布で骨董商・青山喜八の三女として生まれた。骨董屋には外国人がよく来たが、近くのオーストリア・ハンガリアの代理公使ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギーもその一人であった。

18歳なった光子は同公使館に勤めた。ある日、ハインリッヒが騎馬で店へ来た時、氷で馬が足を滑らせて落馬し怪我をしたのを光子が看病したことから、恋愛が芽生えて、父の反対を押し切って明治25年3月に結婚する。

光子が18歳、ハインリッヒは33歳。夫妻には東京で二人の男子が生まれたが、二男のリヒアルトがのちにEU構想の提唱者となる。クーデンホーフ家は十六世紀からハプスブルク家に仕えたヨーロッパ有数の名門で、一族の家系は多国籍な人種が集まっていたが、アジア人は始めてであった。

明治二九年(一八九六)春、一家はヨーロッパに帰り、クーデンホーフ家のボヘミアの領地の居城・ロンズベルク(現在はチェコ国内)に住んだ。当時、東洋の全く知られていない小国・日本から来た「シンデレラ姫」・光子は周囲から自分たちより一段と低い野蛮な民族から来た「卑族結婚」との侮蔑を受けて、親族やオーストリア社交界から珍奇と好奇心な眼差しでみられた。

針のむしろに耐えながら光子はドイツ語、英語、フランス語など外国語を必死で学ぶ一方、

異文化の知識、服装、食事、礼儀、社交マナーなどを猛勉強した。日本とは違いヨーロッパは夫婦単位である。伯爵の夫は地方の大領主であり、行政や宮廷パーティ、社交界との付き合いも夫人としてりっぱにこなさなければならない。

子供は計 7 人が生まれたが、ヨーロッパ人になるためにまず、自分の改革と同時に、子供たちには日本語を一切使わず、純粋なヨーロッパ人に育てようと、寝るのも惜しんで努力した。

華麗なる伯爵夫人という生活の裏では、光子は望郷・郷愁の念をおさえながらの血のにじむような努力と苦闘を重ねていた。その甲斐があって、やっと未知の土地と人々にも慣れて、幸せな一家の暮らしが回りだした 10 年目に突然、暗転する。

明治三九(1906)年 5 月、夫ハインリッヒが突然、病死した。32 歳の光子には 2 歳から 13 歳まで 7 人(四男三女)の子供が残された。遺言状には広大な領地と資産の全財産の管理、子供の後見人もすべて光子に託す、とあった。

クーデンホーフ族は驚き、裁判を起こして財産の取り上げと光子の追い出しにかかった。

それまで子供のようにしか見えなかった光子は夫への愛と子供を守るため、鉄の意志をもつ女に変身した。弁護士をつけて徹底して争い、法律や経済まで学んですべての書類、財産管理のすみずみまで目を通し数々の裁判にも勝った。

光子は職員や下僕に断固として命令して恐れられ、子供達にも専制的な家長となる。財産を子供に残すのと同時に、子供達を養育し最高の教育をつけさせるために家庭教師をつけて金は惜しまなかった。

光子の胸奥でいつも励ましていたのは、東京を発つ前に皇后陛下から賜った『ヨーロッパに行ったらクーデンホーフ伯爵夫人として、日本帝国の名誉を十分に守るように』との言葉であった。

光子はやがて『クーデンホーフ家』を守った立派な伯爵夫人として、周囲からも尊敬される存在となった。東洋的美貌と富をもつ光子は「小さな伯爵夫人」「黒い瞳の伯爵夫人」と呼ばれてオーストリア社交界のスター的存在となる。

大正 2 年(一九一三)年末、一九歳になったリヒアルトと名女優・イダ・ローランが出会った。イダは一八歳年上で、離婚歴があり、子供がいたが、リヒアルトとは恋仲になり成人すると、光子の反対を無視して二人は結婚した。

1923 年、リヒアルトは思想家であるとともに「ヨーロッパは一つである、ヨーロッパ合衆国」を提唱した「汎ヨーロッパ運動」の本を出版、行動家の彼は世界中に運動を広げていった。光子は後年、リヒアルトとも仲直りする

第一次大戦時、光子は娘二人とともに赤十字に奉仕し、オーストリア・ハンガリー帝国崩壊後はオーストリア国籍を守るためにウィーン郊外の森メードリンクに移り、最後までクーデンホフ夫人として生きた。

日本には一度も里帰りすることなく同地で六七歳でなくなった。

月刊『歴史読本』連載中

<禁転載>